

故 横尾俊信先生を悼む



京都大学化学研究所教授

故 横 尾 俊 信 先 生

京都大学化学研究所

徳 田 陽 明

横尾俊信先生は、かねてよりご療養中のところ去る2月25日に逝去された。64歳であった。横尾先生は、東北大学で学位を取得された後、米国レンセラー工科大学博士研究員、三重大学工学部助手、助教授を経て、1988年4月より京都大学化学研究所の助教授として着任され、1994年7月同教授に就任された。その後、20年の長きにわたって、研究指導、後進の育成に務めてこられた。ガラス非晶質の科学における幅広い分野で数多くの研究をされた。また、本紙の第四代編集委員長を務められたとも伺っている。

横尾先生がお亡くなりになってしまったことは、とても残念で寂しく感じている。体調を崩されてからも、いつの日か復活して、あの時は大変だったなあ、という思い出話ができるものと信じていたが、それはかなわなかった。

横尾先生は、故きを温ね新しきを知る、というスタンスで常に研究に臨まれていた。また、現場主義であり、手を動かしてよく観察すること、思いがけない発見を見逃さないということも重要視されていた。朝から深夜遅くまで（早朝まで）仕事をされており、最後の最後まで努力しつくすという完璧主義を貫いておられた。研究発表の練習の際には、時間を尽くして議論が済み、そろそろ終わりかと思ったときに、「じゃ、1枚目からいこうか」のかけ声の後に、本当に細かい点まで修正して頂いた。学生だった時分には（あるいは指導を受けた卒業生にとってもそうだろう）、ずいぶんと細かい所まで修正するものだなと辟易していたが、そこで身につけたことは後々の私を助けている。また、自宅療養中も研究会に來られて、最後まで熱心に卒業研究の指導をされ、完了された。この研究に対する熱い思いは、研究室メンバー一同に強い印象を与え、また私の人生観を変える出来事となった。

横尾先生には沢山のことを教えて頂いた。その中でも「前向きな気持ちでやってみる」というチャレンジ精神こそが横尾イズムの原点だと思う。後進に身をもって伝えていくことによって、いつまでも横尾イズムは輝き続けると信じている。